シリーズ回想 陸上自衛隊演習 95

令和３年度 陸上自衛隊演習に参加して

第２師団 師団長 陸将 冨樫 勇一

令和３年９月15日から11月19日までの間「令和３年度陸上自衛隊演習」（以下「陸演」という）に参加した。

陸演は、陸上自衛隊が総出で参加する実動演習であり、平成５年以来約28年ぶりの実施で、昨今の日本を取り巻く安全保障環境を踏まえ、陸上自衛隊全体としての即応態勢の点検と運用の実効性の向上を企図するものであった。

演習の概要としては、現在陸上自衛隊各部隊が保有する各種計画を刷新した上で、出動整備、準備等を全陸上自衛隊で実施するとともに、指定された特定の作戦基本部隊が九州地域に機動展開し、併せて兵站訓練、衛生訓練、システム通信訓練を行うものであった。

今回、第２師団としては、出動整備から機動展開そして兵站・衛生・システム通信訓練に加え、九州地域で自隊計画の練成訓練を行い、師団としての作戦遂行能力の向上を図るとともに、演習全般を通じて、自衛隊として多くの教訓となるべき事項を修得することができた。

以下、演習を通じての所見を述べたいと思う。

〔自衛隊の輸送にかかる統制・調整能力〕

今回の陸演での機動展開においては、陸海空路それぞれの経路と輸送手段を使用した。陸路では車両移動に加え、鉄道輸送。海路は、海上自衛隊の輸送艦船、米海軍船舶そしてＰＦＩを含む各種民間船舶、空路においても航空自衛隊航空機、米空軍機そして民航機の各種輸送手段を使用した。

また、今回の機動展開は、装輪車両に限らず、相当数の装軌車両を輸送している。これほど多くの重車両の遠距離輸送は自衛隊創隊以来のことである。輸送を実行するための要諦は、輸送にかかる統制と調整である。

まず、中央における統制・調整とそれを受けての現地での調整が綿密周到そして密接に連携していなければならない。

日本を縦断するこれだけの多種多様な輸送手段の行使を可能にする統制・調整能力を自衛隊が保有するということは、組織としての作戦遂行能力の高さであり、今回の陸演を通じてそれを示したことになる。

〔機動展開間における機動部隊の指揮〕

第２師団からは、配属等も含めると人員約５２００人、車両約１８００両が今回の陸演に参加したわけであるが、自衛隊の部隊が作戦する上で一番重要なことは、部隊の指揮である。そのため部隊の掌握が欠かせないが、先に述べたように各種輸送手段使用に伴い、非常に多くかつ、多岐にわたる経路を使用しているので、固有の部隊編成を細分し、移動梯隊をつくり、各梯隊に臨時の梯隊長を命じ、長距離機動しなければならない。

仮に機動間に何かあれば梯隊長が指揮し対応するが、元々の固有の指揮系統でもしっかり把握しなければ作戦は遂行できない。指揮する側だけでなく指揮される側が積極的に指揮下に入る必要があり、本演習においても平素からの練成が重要であると痛感した。

実際、１コ梯隊の車両数が数百両ともなるとその車両行進部隊の長径は数十㎞にも及び、無線による指揮連絡は困難であり中継や各種システムの利用等が必要になる。机上では現れないさまざまな現実的事項を処置して初めて部隊は行動できるのである。

〔各駐屯地等の存在の重要性〕

日本には陸上自衛隊の駐屯地が約１６０、海空自衛隊の基地等を含めると約３００の駐屯地等が存在するが、部隊が機動展開する上でこの存在は極めて重要である。なぜならば陸路機動する場合は一定の距離を移動した後、燃料補給、車両や装備品の整備、宿泊などによる隊員の戦力回復等が任務継続のために非常に肝要な要素となるからである。

実際に過去の東日本大震災、熊本地震等の大規模地震において全国から部隊が集中し支援活動を行った際には、機動展開や災害派遣活動の支援拠点として極めて有効で欠かせないものとなった。

今回の陸演の際にも、単に各駐屯地の各支援機能が通過部隊を支援するだけでなく、サービス提供の時間変更や駐屯地内の移動経路の統制等、サービス提供側がオペレーションと捉え支援を実施したことにより、駐屯地等が部隊の機動展開や戦力発揮の際の極めて重要な支援根拠地となったと実感することができた。

〔兵站と衛生の機能強化〕

「兵站」「衛生」は、本演習における主要演練事項であったが、多くの教訓と部隊運用上の尺度を得ることができた。北海道で20ftコンテナにさまざまな補給品等をバン詰めし、自隊や民間トレーラーで輸送し、海路を経て港に荷揚げし陸路で作戦地域へ輸送する、一連の流れはまさに自衛隊の作戦地域への兵站の推進の一部であり、運用の実効性の極めて重要な要素である。また、作戦地域に野外手術のできる収容施設を開設・運営したが、有事の作戦を考えた場合、作戦のサステナビリティー確保に欠かせない機能の維持強化のために、大変有意義で実際的な訓練となった。

自衛隊は自己完結能力を有するといわれるが、その能力を支えるのが「兵站」と「衛生」である。引き続き、各部隊レベルでの機能の強化を図ることが自衛隊全般の作戦遂行能力の向上に直結することと認識する。

〔各種法的制約の存在〕

今回の陸演においては、平素の現行法律下で長距離機動を行ったが、各種の問題点も認識することができた。例えば、道路交通法の車両の高さ制限もその一つである。道路整備機材のグレーダをトレーラーに積載すると高さが４・２㍍となり、制限内におさめるためにグレーダのタイヤの空気を抜かなければならなかった。

また、自衛隊の特殊車両を公道で運行するには事前の通行手続きが必要だが、その手続き先はそれぞれの道路を管理する国、道、県、市町等となり、相当な手間を要する。更に装軌車をトレーラー輸送する際は誘導車両が必要で、運行時間も夜に限定される。

このように本演習の実動で各種問題点や制約事項が明らかになったということは、改善に向けての努力や或いは事前に準備すべき事項などが認識できたということでもあり、運用の実効性向上に反映できるものと考える。

〔おわりに〕

陸演に参加した部隊長の一人として実動演習を通じて感ずることを述べたが、昨今のわが国を取り巻く環境を考えると極めて有益で意義のある演習であったと思う。今回得たさまざまな教訓などを自衛隊全体で共有するとともに、師団としてもできることから実行に移し、部隊の作戦遂行能力を向上させるように鍛練していこうと思う。

「筆者紹介」

冨樫　勇一

昭和41年８月３日生まれ
山形県出身　防大（電気）89Ｂ
Ｈ18　陸上幕僚監部教育訓練部教育訓練課
Ｈ21　陸上幕僚監部人事部補任課人事第１班長
Ｈ23　第14普通科連隊長兼金沢駐屯地司令
Ｈ24　陸上幕僚監部人事部人事計画課長
Ｈ26　富士学校普通科部長
Ｈ28　北部方面総監部幕僚副長
Ｈ29　統合幕僚監部報道官
Ｈ30　陸上幕僚監部人事教育部長
Ｒ２　現職

「自衛隊の学校・今昔物語」㉑

陸上自衛隊・航空学校

１　航空科職種の紹介

・航空科職種・航空学校の紹介

航空科とは陸上自衛隊の職種の一つであり、各種回転翼機、固定翼機等をもって、ヘリコプター火力戦闘、航空偵察、物資輸送、指揮連絡等を行い、広く地上部隊を支援する職種であり、航空科隊員を育成する陸上自衛隊唯一の教育機関が航空学校です。

航空学校は、明野駐屯地（三重県伊勢市）に所在する本校、霞ヶ浦校（霞ヶ浦駐屯地茨城県土浦市）および宇都宮校（北宇都宮駐屯地　栃木県宇都宮市）が三校一体となり、航空科幹部教育（部隊運用等）、操縦・整備教育等、航空科隊員として必要な知識・技能を修得させるための教育を実施するとともに、併せて航空科の将来を創造するための研究を実施しています。

・航空科の任務等

航空科部隊は国土防衛のため、ヘリコプターの特性を活かしたヘリコプター火力戦闘、空中機動、航空偵察等による地上部隊の支援を任務とするほか、災害派遣、国際平和協力活動、在外邦人空輸等、平素から国内外においての活躍が期待されています。

航空科職種といえば、まずパイロットが思い浮かぶ方がほとんどかと思いますが、航空科には５つの特技（自衛隊における技能）があります。操縦、整備、通信、管制、気象がその５つですが、このうちどれか一つが欠けても航空科職種としての任務は達成できません。それぞれの特技者は、常日頃から責任感と使命感を持って自らの特技能力の向上に努めています。

航空科部隊は、その機動力の高さから、各種災害時においても人命救助等への期待が大きいものとなっています。平成23年（２０１１年）の東日本大震災、平成29年（17年）の熊本地震などは記憶に新しいと思いますが、その他、山林火災における空中消火、台風等による豪雨発生時の捜索救難活動も行い民生の安定に寄与しております。

そして、航空科部隊は国内のみならず国外においても活躍の機会が多くあります。

平成16年（04年）にスマトラ沖地震の際に国際緊急援助隊に初めて参加して以降、平成22年（10年）のパキスタン洪水、平成25年（13年）のフィリピン台風の際も国際緊急援助隊の一員として、患者後送、物資空輸等さまざまな任務を遂行し、現地の復興に寄与しました。このほか、航空科部隊は、天皇・皇后陛下の空輸、サミットなどの国際行事支援等さまざまな任務を遂行しています。

装備面からみると、陸上航空創設当初は米軍から貸与された固定翼機が主流でした。その後、ヘリコプターの導入、エンジンのタービン化が進み、80年代には対戦車ヘリコプターの導入が本格化し、陸上航空は戦闘機能を持つ職種へと発展しました。

そして、アビオニクス化された高性能のヘリコプターが逐次導入され、最近では、固定翼機と回転翼機の優れた特性を併せ持つＶ－22オスプレイ、ＵＨ－１の後継機ＵＨ－２が戦力化の真っただ中にあります。

陸軍飛行学校

２　旧軍における航空科（旧陸軍飛行学校について）

陸軍戦闘飛行隊の総本山と呼ばれた明野陸軍飛行学校は大正９年（１９２０年）４月に開校。それは明治36年（03年）12月17日、ライト兄弟がノースカロライナ州にて歴史的初飛行に成功した17年後であり、日本では明治43年（10年）12月19日に代々木練兵場において、徳川、日野両陸軍大尉が初飛行してから10年後のことでした。

第１次世界大戦は航空戦術の急速な向上をもたらし、日本ではドイツ占領地の青島上空を偵察機が飛行したのみでしたが欧州戦線では戦闘機の活躍が耳目を集めました。

このため陸軍は、大戦の戦訓を学ぶため、フランスから教育団を招き講習を受け、その結果、大正８年（19年）に所沢に航空学校、次いで大正９年（20年）に明野に空中射撃情勢の変化に対応しつつ運用教育、操縦、整備教育を積み上げ、強靭な航空戦士を育成してまいりました。

現在の庁舎とあらわし

このような歴史を有する航空学校、明野駐屯地では、先人たちが築き上げた伝統や各特技における技術等が、次世代の若人たちに綿々と引き継がれ、それぞれの時代における任務達成の礎となっています。現在の航空学校、明野駐屯地に生きるわれわれは、次の世代に、この伝統や技能等を引き継いでいく使命感を持って日々任務に邁進しております。

４　職種・職域の将来

わが国周辺の安全保障環境は、これまで以上に不確実性・複雑性を増大させています。このような中、陸上自衛隊に対する国民の期待は益々大きくなっている状態であり、各種作戦、災害派遣等におけるわれわれ陸上航空の役割も増大しています。

これらに的確に対応すべく、航空学校は、創意を尽くして実践的・実際的な教育を充実、発展させていかなければなりません。航空学校は学生教育から陸上航空戦力の将来運用研究など、今日のすべての校務運営が将来の陸上航空に直結することを肝銘し、三校一体となり職務に臨んでまいります。

また、任務達成と航空安全の確保は表裏一体の関係にあります。われわれは、「航空機の絶対安全」の確保を図り、国民の信頼失墜を招く事故を絶対におこさないという強い信念をもって任務完遂に努めてまいります。

３　駐屯地の歴史的背景

・航空学校・明野駐屯地の沿革

昭和27年（１９５２年）10月、静岡県浜松市に保安隊航空学校が編成され、29年（54年）７月には陸上自衛隊航空学校として再発足しましたが、その翌年の昭和30年（55年）７月、明野に移駐し、陸上自衛隊航空学校、明野駐屯地の歴史が始まります。

航空学校は昨年70周年（明野駐屯地は67周年）を迎えました。明治43年（10年）、日本における初飛行に成功してから終戦までが35年間となりますので陸上航空は旧陸軍航空部隊の２倍の歴史を刻んでいることとなります。

この70年の間、航空学校は、その時々の

美佐の新国防論 144

トルコと日本の物語

ロシアによるウクライナへの軍事攻撃が始まったのが昨年２月、今年もまたこの時期トルコ・シリア大地震の発生という衝撃的な出来事が起きました。

コロナウイルス発生以来の数年で、ある時突然に運命が変わってしまうという光景を目の当たりにし、今生きていることは、まさに「生かされている」のだということを自覚し、そのことに対する尊さを感じます。

現時点で４万人を超えている死者の御霊に手を合わせるとともに、２千数百万人以上といわれる被災した方々が１日も早く日常を取り戻すことを祈るばかりです。

トルコは１９９９年８月17日にも大地震に見舞われています。日本は海上自衛隊をはじめとする救援チームの派遣を実施しました。

輸送艦「おおすみ」、掃海母艦「ぶんご」、補給艦「ときわ」が神戸港を出港、阪神大震災で使われた中古の仮設住宅５００戸を輸送する「ブルー・フェニックス大作戦」を実施したのです。

艦艇にコンテナを搭載するのは初めてだったため、細心の注意を払いながらの航行でした。しかし、一刻も早く被災地に届けるために寄港をエジプトで補給だけにとどめたといいます。

そして、最大速力で被災地に向かいました。その結果、23日ノンストップという連続航行記録を作ることになったのです。

艦隊は驚異的な速さでイスタンブールに入港。早朝から作業を開始し、その深夜までに仮設住宅の陸揚げを完了させたといいます。

このような大ミッションを行うに至った背景には日本とトルコの間の深い歴史がありました。

80年からのイラン・イラク戦争の頃です、フセイン大統領は48時間後にはイラン上空を飛ぶ飛行機は無差別で攻撃すると宣言しました。各国政府は即座に自国民の脱出を開始します。

しかし、日本の動きは鈍く、イラン国内に取り残された日本人は外国便の航空チケットを求めますがどの国も自国民が優先で日本人は乗ることができませんでした。

その時に日本人を救ったのがトルコでした。同政府は自国民救出のための飛行機２機を日本人に差し出してくれたのです。

これにより全ての邦人がイランを脱出します。タイムリミットまであとわずか１時間しかなかったといいます。飛行機に乗れなかったトルコの人々は陸路で脱出したのです。

99年の派遣に際し、横須賀で救援物資を積み込んだ「おおすみ」の出港時、艦長からは次のような訓示があったそうです。

「われわれはイラン・イラク戦争の際に、危険を顧みずに邦人を助けてくれたトルコの友情に、今こそ応えなければならない」と。

そしてこの言葉は、イラン・イラク戦争の時に日本を助けてくれたトルコ政府によるものを彷彿とさせるものでした。

「エルトゥールル号の借りを返しただけです」

この時、なぜトルコが日本人を助けてくれたのかマスコミ関係者も首をかしげていたといいますが、実はここにもドラマがあったことはご承知の通りです。

１８９０年（明治23年）に、日本を訪れ帰国しようとしていたトルコの船「エルトゥールル号」が台風により遭難し、５８７人が死亡、生存者わずかに69人という大海難事故がありました。この時、和歌山県串本町の人々が、不眠不休で生存者の介抱や行方不明者の捜索などを行い、翌年、当時まだできたばかりの帝国海軍が生存者をイスタンブールに送り届けたのです。

先の大地震救援のため海自の救援部隊が通った３万３千㎞の航路は、実はこの時に軍艦「金剛」「比叡」が生存者を載せてトルコに向ったのと同じものでした。

やはり私たちは歴史を顧みることなく生きてはならないですし、過去の人々が遺してくれた遺産に救われていることを自覚しなくてはならないと改めて思います。

トルコでは「エルトゥールル号」の逸話を学校で習うそうですので、あのイランからの脱出劇もその記憶があったからこそのことでした。同じように私たちも「物語を残す」ことが極めて大事だと実感します。

「おやばと」の「シリーズ回想」を書籍化した『自衛官が語る災害派遣の記録』『自衛官が語る海外活動の記録』の意義は大きいと思います。

〔執筆者プロフィール〕

桜林　美佐（さくらばやし　みさ）

東京生まれ。日本大学芸術学部卒。ディレクターなどとしてテレビ番組制作に携わった後、防衛問題研究家に。

著書に「奇跡の船『宗谷』」「海をひらく、知られざる掃海部隊」「誰も語らなかった防衛産業」（並木書房）、「終わらないラブレター祖父母たちが語る『もうひとつの戦争体験』」（ＰＨＰ研究所）、「日本に自衛隊がいてよかった―自衛隊の東日本大震災」（産経新聞出版）、「ありがとう金剛丸―星になった小さな自衛隊員」（ワニブックス）、「武器輸出だけでは防衛産業は守れない」「自衛隊と防衛産業」「自衛官が語る　災害派遣の記録（監修）」「自衛官が語る　海外活動の記録（監修）」（並木書房）など多数。

きずな

人に接するときは「春」のような温かい心で。

仕事をするときは「夏」のような燃える心で。

もの想うときは「秋」のような澄んだ心で。

己を責めるときは「冬」のような厳しい心で。

自衛隊の指揮官として、この春夏秋冬「四季」の心をもって「指揮」を為せ。

これは亡き父の私に対する最後の訓えであり、遺言でした。

父は小学校の校長として教師生活最後の卒業生を送り出した後、それまで心身ともに全力を尽くしていたからでしょうか、お役目を果たすと同時に病に斃れ、多くの教え子たちに見送られながら旅立ちました。

私は地元を遠く離れての部隊勤務でしたし、父に自衛隊勤務のことなどを詳しく話したこともありませんでしたが、母が言うには、父は自衛隊に対する感謝の思いや、自衛官に対する期待が大きかったようで、息子である私が自衛官となったことを、とても喜んでいたようです。

四季の心

運営委員　三谷　直人

一方、大変な仕事であるからこそ、しっかりやって欲しい、とりわけ指揮官は自らを律して部隊を率い、任務を遂行しなければならないとの思いも強かったようです。そのような思いからの訓えであったと思いますが、若い指揮官であった私には、父が残してくれたこの言葉はとても重いものでした。

以来、自衛隊を退職するまで二十数年間、この四季の心を胸に秘めながら自衛官として勤務できたことは、私にとって大切なことであり、また幸せなことでした。この四季の心を保つことは、実際は本当にむずかしいことであり、さらには、年齢を重ねるごとに、責任がより重い職に就くごとに、その難しさや、自らの未熟さを改めて痛感する日々でもありました。

自衛隊を退職して数年が経ちますが、ふと思うことがあります。父が伝えたかったことは、自衛隊の指揮に限ったことではなく、日々を心豊かに生きていくための「心映え」のことではないかと。今なお自分にとって、とても大切な言葉だと感じながら、改めて感謝しています。

この言葉を贈ってくれた時の父の年齢になりつつあります。第二の人生を十分に楽しめなかった父の分まで、春夏秋冬、心豊かに過ごしていきたいと願っています。